

地域の伝統行事を守る
——瑞穂市生津の神明神社と豊受神社の祭礼によせて——
(Protect the Tradition of the Region)

経営学科 米田 真理
YONEDA, Mari

1. 瑞穂市で“お伊勢さん”を見つけた！

朝日大学に就職して10年になりますが、電車通勤のため、穂積駅と大学とをスクールバスで往復するばかりの日々です。けれども、瑞穂市についてお話をうかがったり、調べたりするうちに、もっと市内のいろいろなところを訪ねてみたくなってきました。そこで、目下、自転車の購入を計画中です。もう少し暖かくなったら、乗り回すのが楽しみです。

いま、いちばん興味を持っているのが、生津の神明神社と豊受神社の祭りです。この二つの神社は伊勢神宮になぞらえられ、そのことは生津内宮町や生津外宮前町といった地名にも現れています。神社の名称も、明治7年(1874)に生津村戸長が県庁へ出した報告書には、それぞれ「皇太神社」「豊受太神社」と記されており[1]、今よりもっと、伊勢神宮の正式名「皇大神宮」(内宮)や「豊受大神宮」(外宮)に近かったことがわかります。

実は、私は三重県桑名市の生まれ育ち、さらに在住です。桑名は、東海道五十三次の宿場町で、港には伊勢の国の玄関口として「一の鳥居」が建てられています。この鳥居は、伊勢の式年遷宮のたびに内宮宇治橋から“お古”の鳥居をもらい受け、20年に一度、建て替えられます。2015年はその建て替えの年にあたり、大いに盛り上がりました。私も、御用材をお迎える“お木曳き”の祭りに参加しました。

そんな矢先、瑞穂市の生津に“お伊勢さん”があることを知り、親しみをおぼえるとともに、興味が湧いたのです。

2. 生津の祭礼の変遷

神明神社と豊受神社の祭りはいくつかの行事で構成されており、資料によれば次のような順番で行われています。

- ① 祭元の家から供物を持って行列を作り、両社にお供えする。
- ② 神前でお祓いと祝詞奏上、玉串奉奠(ほうてん)を行う。
- ③ 左大臣・右大臣役の少年が、その年の縁起の良い方角に矢を射る。
- ④ 供物を下げ、若者の代表者が握り飯を本殿の屋根に投げ、飛び越すか否かで穀物の収

穫を占う。

神社の鍵を持つ総代をはじめ、握り飯を投げて占う役の若者や、弓で矢を射る役の少年、晴れ着で着飾った少女など、地域のさまざまな人たちが関わって守ってきた貴重な祭りです。

ところが、資料を調べていると、祭りの基本的な形態は変わりませんが、少しずつ記述の違うところがあります。比較した資料は次の3点ですが、便宜上、以下の文面ではそれぞれ略称で示すことにします。

[神社] :『穂積町史 上』(昭和 54 年)所収「神社と寺院」p426～

[村社会]:『穂積町史 上』(昭和 54 年)所収「村社会と族制社会」p594～

[訪ねて]:『穂積の祭りを訪ねてみよう』(平成 15、穂積町教育委員会)

2-1. 例祭の日程

祭礼は、[訪ねて]には 5 月 4 日とあり、現在もこの日程で行われています。しかし、[神社]によれば、もとは 4 月 15 日だったのが、昭和 29 年の町村合併によって 4 月 1 日に改められたようです。さらに[村社会]には、以前は 10 月 16 日であったが、合併して穂積町となつてからは 4 月 1 日になったと記されています。

一般的に神社の祭礼には、豊作・豊漁を祈願する春の祭りと、収穫に感謝する秋の祭りとがあります。生津の祭礼は、穀物の収穫を占うことから春の祭りであることが知られ、前掲の明治 7 年の報告書では 3 月 16 日となっています。町村合併が祭りの期日に及ぼした影響についてはよくわかりませんが、現在は、住民が参加しやすいようゴールデンウィークの開催になっていると考えられます。

気になるのは、[村社会]が 10 月 16 日という、秋の祭りの期日を示している点です。伊勢神宮では例年、大神に新穀をお供えする秋の祭り・神嘗祭(かんなめさい)が 10 月 15 日から 17 日にかけて行われます。生津の祭礼も神への供物が大きな意味をもっていることから、伊勢神宮に倣った時代があったかもしれません。

2-2. 行列の構成

祭りでは、供物として次のようなものが用意されます。

本御膳(おこわ)、秋葉(おこわ)、御駒(おこわ)、洗米、鮎、人参、大根、しじみ、するめ、昆布、いわし、果物

これらを神元の家から神社に運ぶ際には行列が組まれます。神社総代を先頭に、太鼓、角桶、弓(左大臣・右大臣)、八足、神官、みこ、神酒、塩・水、祭元、と続いた後で、前掲の供物が掲載順に続く様子が、[訪ねて]に図示されています。

と同時に、[訪ねて]には「むかしは、長いれつでしたが、№①～№⑭まで全部「長持」に入れてはこんでいます」と注記され、「①神酒 ②塩・水」と「③本御膳」以下の供物が、一つにまとめられ

て運ばれることが知られます。

この点について、[村社会]には「長持は二つで皇大神宮・豊受大神宮の供物をそれぞれに納めている」と記され、やはり供物はまとめられています。

ところが、[神社]には「本御膳(適当な人四人を選びもって行く)」「秋葉(二人でもって行く)」のように記され、以下、御駒、洗米、鮎を各 2 人、他は 1 人ずつで持ち運んでいたようです。かつては供物を運ぶ人数が揃っており、現在に比べて行列の規模が大きかったことが窺われます。ちなみに、前掲の明治 7 年の報告書には、皇太神社の氏子が 90 戸と記されており、比較的規模の大きな地域であったことが知られます。

2-3. 祭りに関わる名称の違い

このほか、行列に加わる晴れ着の少女の名称は、[訪ねて][神社]が「みこ」、[村社会]では「オソナエ姫」となっています。

また、本殿の屋根越しに投げる握り飯の名称も、[神社]は「おからす様」、[訪ねて]は「おからす」ですが、[村社会]は「オミゴク」という違いがあります。

なお、[村社会]ではこの握り飯の作り方が詳しく挙げられています。すなわち、祭りの供え物を作るために米 1 斗 2 升を蒸し、「オミゴク」を型でぬいて二つ作り、また手でにぎって参詣者にくばるための小さいものを多く作る、というものです。

3. 伝統行事が“地域”を作る

3-1. “伝統的なやり方”を変える際の葛藤

以上のように、生津の祭りは、おそらくは昭和 40 年代ごろから、日程と行列の構成に変化があったことが知られます。日程についてはゴールデンウィークへの移行、行列については規模の縮小とまとめることができます。

そして、祭りの“伝統的なやり方”を変える際には、地域の方々でいかばかり苦心されたかが想像されます。実は、私が住んでいる町内には江戸時代に祀られた小さな祠(ほこら)があり、毎年正月と秋に例祭が行われているのですが、昨秋から、日程を短縮し、飾り付けや各家からの供物の扱いを簡略化しました。30 戸足らずの小さな自治会で、かつては自営の家が多かったものの、近年は会社などへの勤め人が増え、そのままの形を維持することが難しくなってきたのです。とはいえ、従来のやり方を変えることには抵抗があり、決定までに激しい議論が繰り返されました。生津のみなさんも、同じように話し合い、決断なさったのだらうと思います。

日程や規模の問題だけではありません。[村社会]によれば、握り飯を投げて占う役の若者はずいぶん酒を飲んでいたので、「当円で一斗くらの酒は飲んだ」と記されています。かつては祭りに大酒はつきものでしたが、現代的な感覚からいえば、このような飲み方は敬遠されるどころ

でしょう。

このように、住民の数や、職業・年齢の構成、さらに考え方の変化などによって、伝統行事を有する自治体の多くが、“伝統的なやり方”を変えるべきか否かの見直しに直面し、葛藤した経験を持っていると考えられます。

3-2. 続けることに意義がある

“伝統的なやり方”を変える際には、それが簡略化の方向であればなおさら、一抹の寂しさや後ろめたさを伴うものです。「そのままのやり方でも、参加できる人だけでやっていけばいい」という考え方もあります。ただ、参加者がますます減少していくようなやり方では、いつか行事じたいが消滅してしまうかもしれません。

地域の伝統行事は、続けることに最大の意義があります。伝統行事には、その地域を他所とは違うところとして位置づける力を持っているからです。そして、その力は、住民をはじめ、その地域にかかわる人々の生きる力にもなります。

私のゼミ生の中にはネパールから来た留学生がおり、彼の郷里は昨年 4 月に震災に遭いました。実家が全壊し、親しい人が亡くなって落ち込んでいましたが、授業の中で地元の祭りを紹介するときには、笑顔を取り戻してくれました。それはちょうど日本の「初盆」にあたるもので、亡くなった人を、賑やかな芸能とともにあの世に送るのです。壊滅的な被害に遭って衣食住に不自由な状況でも、むしろ、今年こそ祭りが必要なのだとの気持ちが伝わってきました。

東日本大震災の被災地でも、人々の心をつなげ、地域の“誇り”を取り戻す目的で、祭りや芸能の復興事業が行われています。

ただし、自分の地域の“誇り”を持つといっても、それは他所を貶めることではありません。自分の地域について知っているということは、他所の“誇り”をも理解し、尊重することにもつながります。

前述のネパールの祭りは「牛祭り」といい、牛を神聖視するヒンズーの教えに沿って、死者一人につき牛の飾り物を一体ずつ作ります。一方、私のゼミにはベトナム人もいて、彼の地元の「牛祭り」では闘牛を行い、牛を神前にお供えして、お下がりを地域の人々でありがたくいただきます。このように牛に対する考え方や扱い方が全く異なる地域出身の二人ですが、仲が良く、お互いの祭りをそれぞれの地域に必要なものだと思合っています。自分の祭りを大切に思う気持ちがあるからこそ、他者の祭りに対しても、同じ気持ちを持つものとして理解できるのです。

生津の神明神社と豊受神社の祭りも、ぜひ、これからもずっと続いてほしいと願います。生津の“お伊勢さん”と称しては失礼かもしれませんが、伊勢の国の住人である私にとってとりわけ親しみが持てる神社の、春のお祭りを、今からとても楽しみにしています。

[1]『穂積町史 上』p432